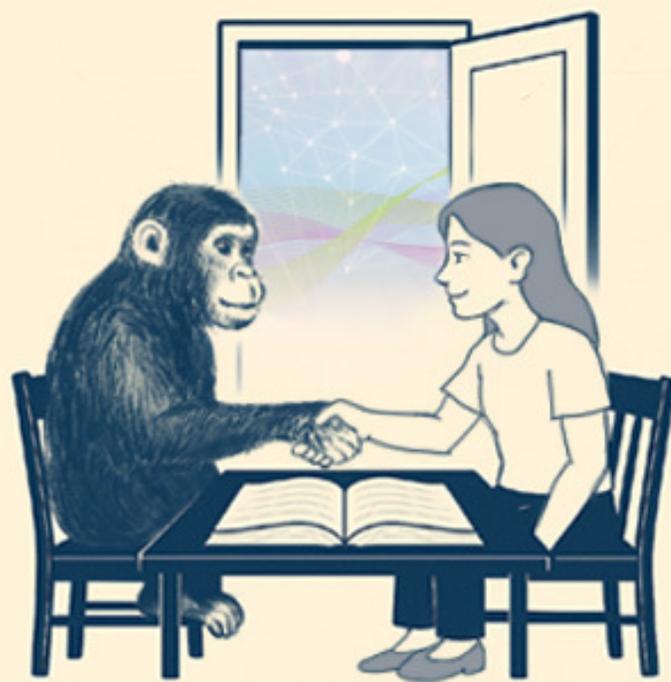

規範性の起源を探る研究会

Origins of Normativity



2026年 1月 27日・28日
犬山キャンパス本館 1階 大会議室

規範性の起源を探る研究会—人文学・心理学・霊長類学研究の対話

日時:2026年1月27日・28日
場所:犬山キャンパス本館1階大会議室

プログラム

2026年1月27日(1日目)

13:30-13:40	開会挨拶・趣旨説明 黒島 妃香(文学研究科)
13:40-13:50	開催によせて 中村 克樹(ヒト行動進化研究センター センター長) 出口 康夫(文学研究科 研究科長)
13:50-15:00	参加者自己紹介
15:00-15:20	休憩
15:20-16:20	セッション1 道德性の起源 話題提供者:平田 聡(野生動物研究センター) 中尾 央(南山大学) 児玉 聡(文学研究科) ファシリテーター:伊勢田 哲治(文学研究科)
16:20-17:00	全体討論
18:00-20:00	意見交換会 センター内食堂にて

規範性の起源を探る研究会—人文学・心理学・霊長類学研究の対話

日時:2026年1月27日・28日

場所:犬山キャンパス本館1階大会議室

プログラム

2026年1月28日(2日目)

9:00-9:30	開場
9:30-	セッション2 言語の起源 話題提供者:定延 利之(文学研究科)(Zoom) 足立 幾磨(ヒト行動進化研究センター)
-11:30	全体討論 写真撮影(センター正面玄関集合)
12:00-13:30	昼休憩:センター内食堂にて
13:00-13:20	スカイラボ見学:希望者のみ
13:30-14:10	セッション3 音楽の起源 話題提供:高田 明(アジア・アフリカ地域研究研究科)(Zoom) 服部 裕子(ヒト行動進化研究センター)
14:10-15:00	全体討論
15:00-15:45	総括:3つの話題を通じた全体と今後の展望 出口 康夫(文学研究科)
15:45-16:00	閉会のことば 中村 克樹(ヒト行動進化研究センター)
16:00	解散

セッション1 道徳性の起源

ヒト以外の霊長類における道徳関連の研究の進展

平田 聡

規範や道徳は、古くは河合雅雄博士がニホンザルにおいて「群れがみずからつくりだし、社会によって伝承されていく秩序系」に関する議論をおこなったように、日本の霊長類学の黎明期からの論点だった。以来、互惠性、利他性、協力、不公平感、心の理解などに関する研究が国内外で展開されてきた。ヒト以外の霊長類を対象にしたこれまでの関連研究を振り返り、今後の展開について議論する。

先史時代の規範をどう研究するか

中尾 央

規範の進化を考える際、チンパンジーやボノボという最近縁種とヒトの距離はいささか遠すぎる。現代の狩猟採集民も大昔の姿のまま生活しているわけではない。であれば、先史時代の考古学的証拠を参照するが規範の（文化）進化を考えるには一番の近道である。もちろん話がそう単純に済むわけがないのだが、どのような証拠から何が読み取れそうか、規範や儀礼の進化について日本先史時代の考古学的証拠から見えてくる（かもしれない）ものを紹介する。

道徳性の起源と倫理学

児玉 聡

道徳性の起源を知ることは倫理学にとってなぜ重要なのか。一つには、道徳は生得的なものか、それとも社会的に形成されるものかという論点がある。ジョン・スチュアート・ミルは道徳を教育と制度によって形成されるものと考えたのに対し、チャールズ・ダーウィンは社会的本能に道徳の起源を見た。進化と道徳を直接結びつける社会ダーウィニズムが自然主義的誤謬として批判され、一時は進化論と倫理に関する議論は下火になったが、20世紀後半には血縁淘汰や互惠的利他性などによる利他性の進化論的説明が発展した。しかし、この説明では道徳の普遍性が説明できないという困難があった。近年、フランス・ドゥ・ヴァールによる公平性研究は、正義の要請としての道徳の普遍性を説明する可能性を示している。ピーター・シンガーの「理性のエスカレーター」の喩えは倫理の進化的基盤と理性による拡張を結びつける視座を提供している。最後に、進化論的説明が道徳の客観性に与える挑戦について紹介する。

セッション2 言語の起源

言語の(脱)現場性

定延 利之

この発表では「(脱)現場性」をキーワードに以下2点を述べる。

1. 人間が驚きの声（感動詞）を持つことは、人間の知識の脱現場性を示していると考えられるかもしれない。
2. だが、人間の言語の根本は現場（いま・ここ）にある。根拠は以下2点。
 - (a): 文法を司る諸概念は、表現対象の現場性が低下すると弱化しがち。
 - (b): 人間の言語コミュニケーションは、脱現場的な「通信」としては説明しきれない。

霊長類研究から見る言語の進化的起源

足立 幾磨

本発表では、ヒト言語の特徴である「現場性」—共同注意にもとづき、いま・ここで相手と状況を共有しつつ意味を立ち上げる性質—を手がかりに、霊長類研究から言語進化を再考する。特に、指差しに相当するジェスチャー、相手の意図理解、視線追従、社会的学習などに焦点を当てる。

セッション3 音楽の起源

音楽の起源としての養育者-乳幼児間の身体的リズムの協応

高田 明

Coordination of corporeal rhythms between caregivers and infants as the roots of music

ジャン=ジャック・ルソー（1763/2016）は音楽と言語はその起源を同じくする、すなわちこれらはいずれも他者と関わるための精神的な欲求および情念から発すると論じた。この思想は、それまでの神学的な発想から音楽理論を解き放ただけでなく、現代の言語科学やコミュニケーション論を導くことになった（高田 2025: 41）。本発表では、広義のリズムをさまざまな動きの長さや強弱のパターンとしてとらえる。そして、発表者がこれまでに収集したフィールド・データや文献資料に基づいて、外界のリズム（e.g. 月や太陽の運動）と身体的なリズム（e.g. 月経周期や概日リズム）の呼応、養育者と乳幼児の間における身体的なリズムの協応（e.g. 抱きと睡眠、授乳と吸てつ、ジムナスティックと歩行行動）に注目しながら、私たちの協調的な行為や社会性の源について考察する。さらに、そうした協調的な行為や社会性が歴史・文化的に構造化された産物として養育者 - 子ども間相互行為、とくに乳児向け歌（Infant Directed Song）を読み解くことで、音楽実践や言語実践の多様性と普遍性について再考する。

霊長類からみる音楽性の起源:リズムの共有基盤と進化

服部 裕子

ヒトにとって音楽は普遍的であり、ほぼすべての社会に音楽活動が存在すると言われている。音楽性の進化については、社会的結束 (social cohesion) と信頼できるシグナル (credible signalling) が近年、重要な要因だと言われており、メロディよりもリズムの方が進化的起源は古いと考えられている。しかしながら、表現じたいは化石には残らないため、そこから経緯を明らかにすることは難しい。そこで本発表では、チンパンジーのドラミングや合唱と、ヒトの音楽を比較し、時間構造（等時性、拍抽出、タイミング調整）の共有点と分岐点を検討する。さらに、それらが社会的結束や信頼できるシグナルとしてどのように機能するのかを考察し、霊長類に共通するリズム基盤からヒト固有の共同生成・規範化へ至る進化的経緯を議論する。